

国際学会報告

第3回国際アンセルムス学会

アンセルムス学会は1979年7月2日より5日までの4日間、カンタベリのケント大学で催された。ANSELM AT CANTERBURY と呼ぶ。会頭はR. Klibansky, 事務局長は G. R. Evans であった。これはベック (1959年), ローマ (1969年) につづく第3回国際学会である。加藤信朗氏のおすすめにより、日本人としてわたくし1人だけであったが、これに参加できたことを感謝したい。

参加者は名簿では80名をこしていたが、実際にこられたのは50名ほどであった。ただし夫人同様のほか4人の子供連れの方まであって、実勢は80をこしていたと思う。大多数がケントのラザフォード・カレッジに泊まり、三度の食事を共にしての学会であった。それだけに印象が強い。研究発表は全体討論のものを合わせて52が予定されていたが、これも実際行われたのは40を割っていたと思う。4グループに分けての発表だったので、聞いたのはその一部にすぎない。

全体討論は R. Klibansky と C. Hartshorne とによる存在証明をめぐる *disputatio*, D. P. Herny の *Anselm and medieval meaning-love*, および J. Dawson の *The Anselm Concordance* の3つであった。そのほか P. Vignaux, *Monologion* と, T. F. Torrance, *St Anselm's understanding of creation and its intrinsic intelligibility* の2つが予告されていたが、これは行われなかった。代わって Hartshorne のショートペーパー *Anselm's argument and Aristotle's 'first law of modality'* が第1回討論の延長として行われた。ショートペーパーの中でわたくしの興味をそそったのは, M. B. Pranger (Amsterdam), *Language-games and deceit in Anselm's De casu diaboli*; R. A. Herrera (So. Orange), *The eschaton and an argument from fitness in the Cur deus homo*; T. A. Losoncy (Ponna), *St. Anselm's Proslogion-variations on an Augustinian problem* などであった。これらは特に大きい問題を扱ったのではないが、こまかな点で教えられること実に多かった。1人の発表と質問の時間も最初の予定より延長され、プリ

ントの渡されていたものについてはそれを種に質問の準備もできて大変面白くあった。わたくしの発表は *Structure and characters of the Cur deus homo* で、これは *Cdh* の三極構造をのべたものである。

発表の中には11, 12世紀の歴史に関するもの、教義学的なもの、信仰論的なものも多かったのであるが、これらについてわたくしが余り強い関心を抱けなかったことはアンセルムス理解の上では片手おちかもしれない。

Herrera 氏とは終始一緒になり、また Hartshorne 先生とは散会后一日残留して東西比較哲学のこと、Whitehead のことなど伺って楽しくあった。R. Southern 氏、H. Kohlenberger 氏をも知りえて有難くあった。今回は未決定であるが、10年後といわず5年後にしたいとの会頭提案が最後に出された。

(泉 治典)

第3回国際エリウゲナ会議

国際エリウゲナ会議は、1970年にダブリンではじめて開催されたが、1979年8月末、第三回の会議が、西ドイツのフライブルク大学で催された。この会議の主体となる学会は、「エリウゲナ研究振興協会」と名付けられ、今回の会議は、「ドイツ研究協同体」(DFG)の援助と、ハイデルベルク科学アカデミーの協力を得て、「エリウゲナの(依った)諸原典」という統一テーマのもとで開かれた。DFGとの関係上、人数が著しく制限され、正式参加者は約30名、それにフライブルク大学哲学科学生約10名が加わり、研究発表者12名という、こじんまりしたものであった。

学会の行事は、8月27日午後8時に、この学会の会長であり、今回の主催者であるフライブルク大学のバイアーヴァルテス教授の公開の開会講演で始まった。講演の中で、教授は、ヨハネス・スコトゥス・エリウゲナを、思想史的に、アウグスティヌスとアンセルムスの間の中世初期の最も驚嘆すべきかつ説得力のある思想家と位置づけ、中世盛期とルネサンス期には、かれの思想が、教皇の禁止にもかかわらず少なからぬ影響を与えたこと、その後時を経て、19世紀に、トマス・アキナス